

## 推進部会評価に関するアンケート結果

平成 20 年 3 月 11 日  
宇宙開発委員会 事務局

平成 20 年第 3 回推進部会(平成 20 年 2 月 12 日開催)において、推進部会の評価票の中で、「妥当」、「概ね妥当」の基準がわかりにくいというコメントがあったことから、今後の推進部会のよりよい運営のために、アンケートを実施した。

アンケートは平成 20 年 2 月 13 日から 20 日にかけて、推進部会構成員 16 名に依頼し、7 名の回答を得た。  
アンケート項目は、以下とした。

「妥当」、「概ね妥当」を選択する際どのようなことを基準として判断しているか。

各々のアンケート回答は別紙に示す。

「妥当」「概ね妥当」に関する主な意見は以下である。

### < 妥当 >

- ・ 水準の高さ、先端性、確実性、研究・検討の深さ、バランス(無矛盾性)などを見て、十分可と認めるとき
- ・ 説明内容がほぼ納得出来、且つ合理的と思われる場合
- ・ 評価者が自信を持って自己の判断を示せる場合

### < 概ね妥当 >

- ・ 水準の高さ、先端性、確実性、研究・検討の深さ、バランス(無矛盾性)などの一部に不十分なところがある時
- ・ 一部に疑問がある或いは個人としての自分の意見と異なる点はあるが、大局的には納得出来る場合
- ・ 説明や資料は正しそうだが、プロジェクトの流れ全体が的確に把握できない場合
- ・ 疑問がないが、そうかといってこの説明や資料だけで完全に納得できないと感じた場合

事務局としては、各特別委員において今回のアンケート結果を参考にして頂きつつ、今後ともそれぞれの委員の各方面の経験、知見に基づく評価をして頂きたいと考えている。

なお、JAXA 資料における説明が足りないものは評価しにくいという意見があった。事務局としては JAXA と事前調整し、可能な限り資料内容を評価要領に則したものとすべく努力するが、行き届かない点については、質問票の中でご確認頂きたい。

別紙

「妥当」、「概ね妥当」を選択する際どのようなことを基準として判断しているかについてのアンケート回答

- 1 妥当という言葉は断定的であり、ミッションとか、科学的意義など

には使うのに抵抗がないが、開発体制や成果などは、失敗の可能性があり、妥当という言葉は使いづらい。したがって、打ち上げや機器故障などが無いとすれば、というような条件が必要であろう。

- 2 説明内容がほぼ納得出来、且つ合理的と思われる場合は妥当、一部に疑問がある或いは個人としての自分の意見と異なる点はあるが、大局的には納得出来る場合にはほぼ妥当、と判定している。
- 3 「妥当」は文字通り、評価者が自信を持って自己の判断を示す言葉であり、それは評価者全員が認める場所であろう。そこで「概ね妥当」を選ぶ場合だが、二つのケースに分かれる。一つは自信をもってこれは妥当だと言えないと判断したときである。疑問がないが、そうかといってこの説明や資料だけで完全に納得できないと感じたときがそれに当たる。もう一つのケースは説明や資料は正しそうだが、プロジェクトの今後の流れ全体が的確に把握できないときである。自信をもって妥当とはっきり言えないから、概ね妥当になるケースである。
- 4 自分自身の開発実務経験から感じる違和感の程度による。  
それに関する自分のコメント内容が  
「NOTE」程度以下であれば、「妥当」  
「CAUTION」程度であれば、「概ね妥当」  
「WARNIG」あるいはそれ以上と判断されれば、「問題あり」とすることが多い。
- 5 原則は、「宇宙開発に関するプロジェクトの評価指針」に示された各評価項目、内容に基づき、評価資料に当該記述が為されていれば「妥当」、記述が若干不足しているが、プロジェクト実行上大きな影響が無い場合は「概ね妥当」との評価をしております。記述の過不足、プロジェクト実行上の影響の有無に関する判断基準は各委員の主観によらざるを得ず、その為に各方面の構成委員による

評価に委ねられていると理解しております。

- 6 項目に応じて参照すべき対象(事柄)は異なるわけですが、総合的には、  
水準の高さ、先端性、確実性、研究・検討の深さ、バランス(無矛盾性)などを見て、十分可と認めるときに「妥当」としています。  
一部に不十分などところがある時には「概ね妥当」としますが、その際は、必ず、「概ね」であることに関するコメント附します。  
また、「妥当」とした際にも、「妥当」と認めた上での更なる留意点、ないしはコメント(提言)を記すようしています。
- 7 個人的には、宇宙開発は積極的に取り組むべきと考える推進派である。日本の「もの造り」の力が合ってこそ、今日の宇宙技術も支えられている。また、新しい技術への取り組みにもなり、国内外の産学官連携のチャレンジにもなる。しかし、現在の衛星評価は、数年後先や10年先の打ち上げとなるわけだ。宇宙開発をマクロから見ると短いスタンスとなるかもしれないのだが、経済から見ると10年では世の中がかなり変革し、我が国は若者が減少し老人王国へと社会形態が変わる。そのことを考えると、今ここで数百億の税金を予算として取ることが果たして正しい事なのかと正直ゆれるのである。  
さて、肝心な選択の仕方だが、どのような役割でどのような成果が出せるのかを基本的にチェックするが、決め手はやはり適切な資料となっているかどうかの判断である。我が国にとって本当に必要な衛星かどうかは別である。

特別委員の皆さんに共通して、一つの誤解がある。プロジェクトの内容が「妥当」か「概ね妥当」か聞かれているのではなく、「開発研究」なり「開発」なり、次に進める事の可否を問われている。